生活から自然な学びへ

フレネ学校の幼児たち

猶原　和子

南フランス、ニースから車で約一時間。山に囲まれたバンスという小さな町にフレネ学校がある。公立学校の教師であったセレスタン・フレネ（一八九六～一九六六）が、従来のフランスの「説明と練習の教育」から「表現と創造の教育」へ転換を図り、実験学校として設立し、今やフランス全土の約十パーセント、世界の二七カ国で実践されているフレネ教育が育まれた場所である。現在は国立学校として、その独自の教育を保障されている。

小高い丘の上、教室が点在し給食室やトイレも別建て。幼児、低学年、高学年の三クラスで異年齢の子どもが一緒に学んでいる。今回は三歳～五歳のミレーユ先生の幼児クラスを中心に、私の記憶を辿りながら子どもたちの姿を紹介したい。

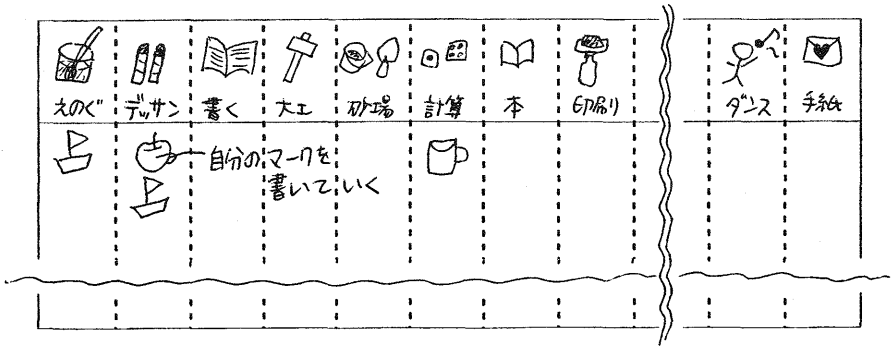
ゆったりとした一日の流れ

学校は幼児から高学年まで週四日、朝九時から午後五時まで、水と土日が休みである。午前中は自由作文の交流と計画表に沿った個人の学習、午後がアトリエ（表現活動）とコンフェランス（自主研究の発表・金曜日は全員での協同組合の話し合い）。大きく四つの活動時間にわかれる。

朝八時半、子どもたちが保護者とともに次々と登校してくる。ミレーユのクラスでは、まず黒板に書かれた二十種類の『計画表』に、今日何をするかを一人一人が自分のマークで書き入れる。

その後九時までは、保護者も子どものそばで自由作文を手伝ったり、先生と親しく話したり、のんびり柔らかいスタートである。

▼表1　黒板の計画表



これの他に個人用の評価表がある。毎日、ミレーユ先生が一人ずつ呼んで、今日は何と何をしたかをマークしていく。月曜日は青・火曜日は黄色というように色分けして、2週間で一枚。それには、先生からの評価や、保護者からのメッセージが書いてある。（『フレネ教育研究会報』No.34より　けやの森学園の池田彰子氏のメモ）

朝の会の自由な表現

やがて凹型のソファコーナーにみんな集まる。「今日は何日、何曜日」と暦で確認したあと、給食の人数を係の子が調べに出かける。自分たちだけでなく、上級生のクラスも確認して報告する。学校を運営するひとしごとを幼児クラスも請け負っているのである。

その後は自分の経験したこと、発見したことなど発表したい子がでてくる。

「きのう、お父さんが退院したの」

「どうしてなの」「くもにさされたの？」

「はじめて入院したの？」「アレルギーは」

次々ととびだす質問に、その子が答えていく。

またある子は、カーニバルに向けての衣装を見せる。「私は人魚になります」「かわいい」。遊び道具やお気に入りを持ち込む子もいる。

▲「朝は　ゆったりと」（大森清美氏が2003年3月に写す）

▲「朝の会　対話から自由作文へ」（寺村久美子氏が2003年に写す）

そこでの対話から活動が膨らむ場面もある。一時間近く朝の会は続くのだが、子どもたちは互いの話をよく聴く。ささやく声は発表に関連したもので邪魔にならない。

子どもの語る生活は、先生が簡単な文章にして書いてあげる。文字学習の出発点がここにある。自分の語ったことばが文字になる喜びは次への意欲を促す。子どもは書いてもらった文字を読んでいるかのごとくに友達に語り、家族に語る。教室には毎日語られる生活が絵と文で教室に飾られている。やがて内容を知っている年長の子の作文から必要なことばを探しだし、書いてみようとする行為も現れてくる。自分のための自分のことばとして、子どもは文字を覚えていくのである。

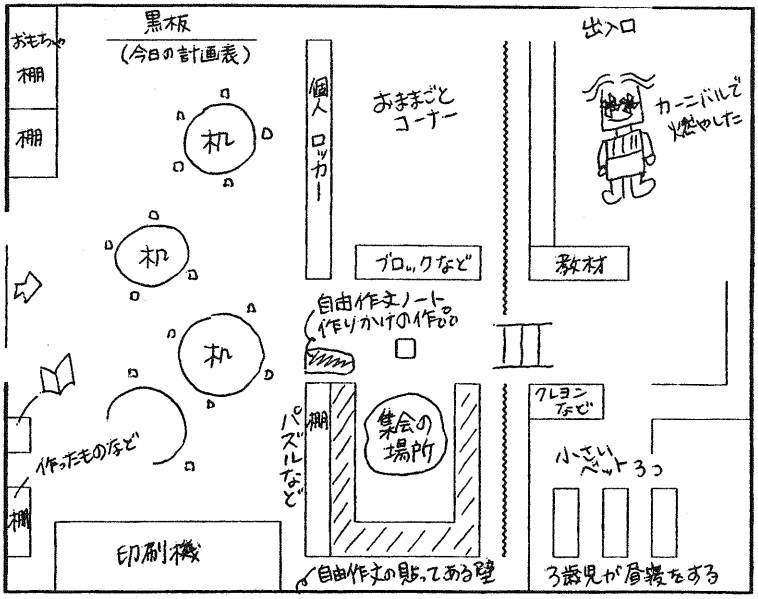
朝の会後は自由な活動。計画表に表した活動をそれぞれが始める。人形劇、粘土、自由作文の印刷（文字を見て活字を拾い、印刷する。三歳児は

先生が活字を並べる）など。大声を出す子はいない。いきいきと自分の選んだしごと（遊び）に向かっている。

散歩にでかけることも多い。自然の多く残る敷地で自由に遊ぶ。危ないところは五歳児が教えている。虫や草花を見つけのぞきこんだり、新しい遊びを思いついたり。五感を通した体験は、教室に戻って絵や粘土、ことばで表現されていく。

自分のペースで静かに活動を進めているうちに昼食を知らせる音が聞こえてくる。年長が年少さんと手をつなぎ、ランチルームへいざ出発。

食事が終わると、休憩。三歳児は午睡もできるような環境が整っている。眠らない子は絵を描いたり、自分の活動を続けている。



▲幼稚園クラスの部屋を上から見ると――（池田彰子氏のメモ）

協同組合の話し合い

午後の活動で、私が興味を持ったのは週一回行われる協同組合の会議である。フレネ学校では鶏を飼って卵を売ったり、自分たちの自由作文集を印刷して売ったりと、子ども自らが活動資金を稼ぎ、帳簿をつけ、自分たちに必要なものを購入している。学校協同組合は、自分たちが気持ちよく生活するために必要な自治的活動を営んでいる。

週一回の会議には年少から高学年まで子どもたち全員が集う。天気のよい日は、外の演劇も出来る丸い広場に集まる。提案や報告だけでなく、問題行動も取り上げられ、みんなで話し合いが進む。

私が参観したときには高学年の男の子が木登りの時に邪魔して、意地悪するという訴えについて話し合っていた。不快な思いをした子たちからは次々と事実が述べられる。「降りられなくなった」「怖がらせた」。幼児クラスの子も嫌だったことを堂々と話し、それに対する弁明を求めていた。弁明が認められない時には、まずやった本人が解決策を提案し、話し合われる。教師はみんなと一緒に話を聴き、方向がずれそうな時だけ発言する。今回は協議の結果、「二週間木登り禁止。その後彼の行動が変化したかをもう一度話し合う」ことに決まった。彼はそれを了承し、意地悪をしたことを謝っていた。

印象的だったのは、教師がその子を罰するのでなく、子どもたち同士が学校という社会の一員として、いちばんよい道を話し合うという姿である。レッテルを張るのでなく、問題は当然のこととして話し合う。同じように人を助けたり、よかったことは仲間から賞賛される。そのような自治的な活動に三歳から加わっているということに私は驚かされた。

もちろん、教室内でのもめごとも起きる。小学生は壁の「私は賞賛する※提案する※批判する」とい

うコーナーに意見を書き、まとめて組合の会議やクラスでの話し合いで解決していく。幼児クラスでは、できるだけその日のうちに話し合われる。帰りの会では様々な一日の生活の発見だけでなく、事件やトラブルも話題になり、話し合われていた。

フレネの子ども観

日本ではフレネ教育を自由放任ととらえる人がいるが、決して自由主義教育ではなく「見守り方式」の教育である。フレネは、子どもの内的自然（潜在的可能性）を尊重し、その感情に合った表現を獲得させていくこと。また、子どもを「未来の自立した市民」と捉え、総合的教育活動を通して市民的資質の形成を目指すことを掲げている。

瓦林亜希子の文章を引用したい。

「フレネは『生活とは本質的に動的なもの、ダイ

▲「様々な学習材（子どもの作品から生まれた教材も多い）」（大森清美氏が写す）

ナミックなもの、環境により、子どもにより、教育者により変わるものである』と述べている。子ども一人ひとりの思考や感情、欲求といった内的自然を尊重し、他者の持つ内的自然との関係性の中でぶつかり合いながら、自己を成長させていくのである。子どもの『生活』が中核にあり、その周辺に様々な形式、内容を持った学習活動が組織されているのがフレネ教育だと言える。全ての活動は、個が個であるとともに、個の共有化が図られるための営みである」。

生活から自然な学びへ

私がフレネ学校で一番驚いたのは、一人ひとりが意識を持ち、静かに活動している姿であった。また、二週間ごとに自分の学びの履歴を振り返り、友達や教師、保護者とともに評価していく姿も印象深い。話し合いの中で評価を訂正し、次への計画をたてる。このような自立的な学習の原点が幼児期にあるのは間違いない。個々の学びを触発する環境づくり、欲求に対応できる数多くの学習材（ＢＴ）。手仕事やアトリエ活動の重視。保護者との密接な連携。

「ハイハイ」と騒々しい日本の学校教育を問い直し、幼児期の「生活」から「自然な学び」への道筋を改めて問い直したいと思う。

（お茶の水女子大学附属小学校）

参考・引用文献

『フレネ教育研究会報』№34
同右　№55、瓦林亜希子「フレネ教育法における子ども観」二〇〇〇年七月